

京大広報

No. 366

京都大学広報委員会



法経第1教室の試験場へ向かう受験生（2月28日法経中庭にて）

—関連記事本文 596 ページ—

目 次

名誉教授称号授与式.....	596	<随想>	
平成元年度入学者選抜学力試験		コンピュータとシステム技術	
第1段階選抜合格者の決定.....	596	名誉教授 三根 久.....	599
1月29日の現場検証.....	597	討 報.....	600
<紹介>		教養部にかかわる構想検討委員会	
教養部・社会学教室.....	597	からの報告（別冊）.....	601

〈大学の動き〉

名誉教授称号授与式

2月25日（土）午前10時から、総長室におい

て、薬学部長の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行され、山科郁男元教授（薬学部）に称号が授与された。

平成元年度入学者選抜学力試験第1段階選抜合格者の決定

平成元年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜合格者が決定され、2月16日（木）、志願者に通知された。学部別の合格者数は次表のとおりである。

また、第2次学力検査は同表に記載の試験場で行われる。最終合格者の発表は、3月12日（日）（前期日程試験）と3月23日（木）（B・後期日程試験）に出願者（第1段階選抜不合格者を除く。）全員に「合格者受験番号一覧表」を電子郵便で送付する方法によって行う。同一一覧表は、当日午後3時より各学部掲示場に掲示もする。

学 部	日 程	募 集 人 員	第1段階選抜合格者数	第2次学力検査試験場
文 学 部	前 期	190	762	文・法・経済学部
	後 期	30	213	法・経済学部
教 育 学 部	前 期	40	164	教 養 部
	後 期	20	140	〃
法 学 部	B	400	1,445	文・法・経済学部
経 済 学 部	前期「一般」	140	507	法・経済学部
	〃「論文」	60	270	〃
	後 期	40	215	〃
理 学 部	前 期	276	1,478	教 養 部
	後 期	30	1,275	〃
医 学 部	前 期	110	550	医 学 部
	後 期	10	156	〃
薬 学 部	前 期	50	189	薬 学 部
	後 期	30	170	〃
工 学 部	前 期	617	2,168	工 学 部
	後 期	413	1,780	〃
農 学 部	前 期	260	916	農 学 部
	後 期	65	513	〃
小 計	前 期	1,743	7,004	
	後 期	638	4,462	
	B	400	1,445	
合 計		2,781	12,911	

（注）法学部、経済学部（後期）の第1段階選抜合格者数には、「外国学校出身者のための選考試験」の第1次選考合格者の39名と16名が、それぞれ含まれている。

1月29日の現場検証

1月29日(日)、警察による教養部構内の現場検証が行われた。

この日の現場検証は、昭和63年7月1日(金)に起きた「凶器準備集合」「暴力行為等処罰に関する法律違反」「傷害」の被疑事件について行われたもので、本学関係者立会いの上、午後0時30分から始まり、同5時頃終了した。

<紹介>

教養部・社会学教室

京都大学の社会学関係の講座には、文学部哲学科に社会学講座、比較社会学講座、社会人間学講座があり、また教育学部に教育社会学科として教育社会学講座があって、それぞれの専攻学生を持ち、大学院において研究者も育てている。一般教育すなわち教養課程を担当する教養部にも、社会学教室があり、社会学を担当する研究者が3人いて、それぞれ歴史社会学(近現代社会の比較文化・比較社会論的研究)、理論社会学(社会的自己をめぐる理論的研究)、経験社会学(社会現象の統計分析と数学的モデルの構築)を専門としている。それぞれの教官が担当する講義と演習、実習があり、一般教育科目の社会学として、この科学の基礎的知識を全学部の学生を対象に教育している。

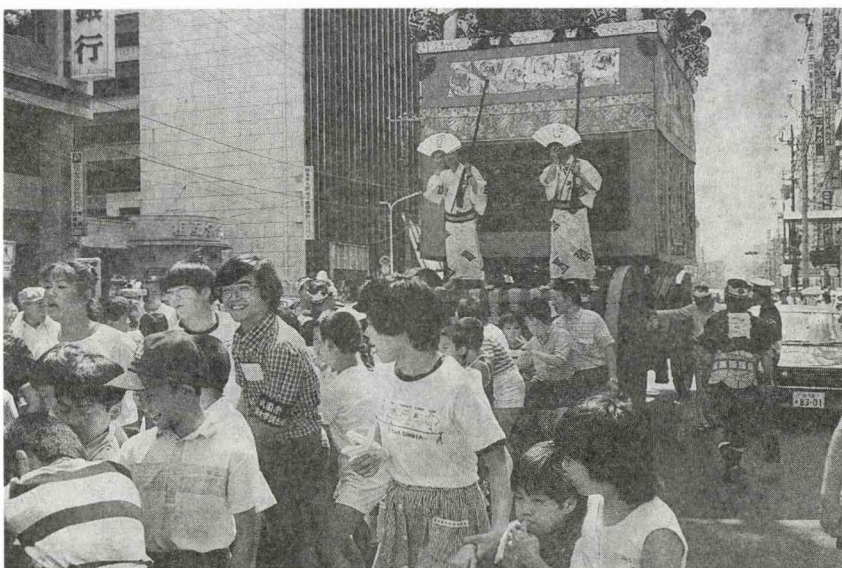
しかし教養部にあってその他にない特色は、学科学目として文化人類学が本教室に所属していることであろう。今回はその

文化人類学を主として紹介する。現在のところ、人類学関連の講座・研究組織として、京都大学においては、理学部の自然人類学講座、生態人類学講座、人文科学研究所の社会人類学研究部門などがあり、東南アジア研究センターやアフリカ地域研究センターにも関連する専門研究者が居られるけれども、残念ながら文化人類学ないし民族学を専攻する正規の教育課程がない。

文化人類学は、戦前には民族学という名称で知られていた。戦前にも民族研究所が文部省直轄研究所として東京に設置(1943年)され、また戦後になって国立民族学博物館が吹田市に設立(1974年)されている。しかし文化人類学という名称は、広義の人類学において自然人類学に対置する分野として、民族学の伝統を継承して発達してきたものである。東京大学などには、戦後の学制改革の時に文化人類学講座が誕生している。

人類の文化・社会・生活を総合的実証的に研究する科学として、文化変化ないし進化発展という時系列的研究と、文化・社会・生活の構造ないし機能を現時点において分析する共時的研究が、欧米諸国においては多様な展開を示しており、国際化時代の基礎的学問として重要な領域になっている。わが国においても前述の民族学博物館や東京大学等を始めとする研究機関で、多くの業績を生みだしてきている。

実証的現地研究の長い伝統を持つ本学に文化人類学の研究部門のないことには、奇異に感じら



祇園祭を調査する学生(腕章を付けている)

れるむきもあるかもしれないけれども、それが現時点での姿である。本学でこの学問を志望する学生にとってその学習は容易ではないが、それにもかかわらずユニークな人材が生まれている。

かかる状況下において、現在ただ一つ文化人類学を担当しているのが、教養部社会学教室である。現在2人の常勤教官と2人の非常勤教官によって、その研究と教育が行われている。常勤教官はアフリカの社会と文化、日本文化の地域性と都市人類学、祭礼を通しての都市研究、非言語的社会接触の研究などをその主要な研究対象としている。教育面でも概論的講義のほかには演習と実習という科目がある。演習では2常勤教官の担当と、非常勤教官による「女性学」演習がある。昭和63年度の常勤教官担当の演習では「アフリカ地域研究」と「非言語コミュニケーション」をテーマにした。

本教室の授業科目には理科系の実験に対応する文化人類学実習の科目がある。この実習は過去20年にわたって、京阪神の都市の祭礼催事の研究を履修学生全員の共同で行う、という形式を続けて



天神祭で神官さんを囲んで

きた。例えば、1973年から3年単位で京都の祇園祭をはじめとして大阪の天神祭、そして神戸の神戸まつりを調査してきたが、1983年からは再度祇園祭、天神祭を調査することにして、現在は天神祭の第2ラウンドの第3年目に入ろうとしている。通常、文化人類学の調査は長期参与観察と聞き取りを主体としている。実習の前半は春ないし夏の催事の聞き取り調査でおり、後半はそのとりまとめと報告にあたるという形で進む。履修学生は文学部、理学部をはじめとしてほぼ全学部におた

るが、新入学生にとって、この調査体験は非常によい人生経験となり、その後の人生のコースにも良い影響をあたえている。この実習の経験者のなかから、研究者の道に進んだ者もすくなくない。

文化人類学は、わが国ではなお若い学問とされているが、国際化の進行するなかで、諸民族、諸国民の相互理解がますます必要になっている今日、この学問の重要性は増大していると思われる。京都大学にもその専攻課程が誕生することを期待しつつ、教養部社会学教室においては文化人類学の教育と研究の伝統を継承して研鑽を続けている。

(教養部)



天神祭を調査する学生

訃 報

松尾 義海（本学名誉教授・文学博士）
2月17日逝去，79歳。昭和9年本学文学部卒業，28年

本学文学部教授就任，48年退官。56年 勲三等旭日中綬章。専門はインド哲学史。

